

高校生・大学生におけるインターネット・携帯電話依存，ネットいじめ経験とひきこもり親和性の関連

The Association between an Affinity for Acute Social Withdrawal (Hikikomori) and Problematic Use of Internet/Cell Phone and Cyberbullying among Japanese High School and College Students

青山 郁子 AOYAMA, Ikuko

● 東京福祉大学心理学部
Tokyo University of Social Welfare, Department of Psychology

Keywords

ひきこもり，ひきこもり親和性，インターネット依存，携帯電話依存，ネットいじめ

hikikomori, hikikomori affinity, internet dependency, cell phone dependency, cyberbullying

ABSTRACT

過去数十年日本においてひきこもり問題は、社会的および教育的に深刻な課題となっている。近年は精神疾患等が原因ではないひきこもり事例の増加が指摘されているがその背景に、インターネットや携帯電話の使用をめぐる問題があるのではないかと指摘がなされている。そこで、本研究ではこれらの関連を明らかにするため248名の高校生と333人の大学生、計581名を対象に、インターネット・携帯電話依存的利用傾向、ネットいじめ経験、自己肯定感とひきこもりに肯定的な態度を示す「ひきこもり親和性」との関係性を調査した。内閣府（2010）の調査では、ひきこもり群は、メールやウェブサイトの閲覧・書き込みが多いと指摘しているが、完全なひきこもりまでは至らない「ひきこもり親和性」状態では、むしろこのようなインターネット・携帯電話の依存傾向は負の関連性を示した。一方、ネットいじめの被害経験とひきこもり親和感情に正の関連性が示された。

For the past decade, acute social withdrawal (hikikomori) has been a serious social and educational problem in Japan. Recently, it has been pointed out that the problematic use of the Internet and cell phones can be related

to hikikomori. Thus, the purpose of this study is to examine the relationships between hikikomori affinity, the problematic use of the Internet and cell phones, and cyberbullying experiences among youth. The participants were made up of 581 students (248 high school and 333 college students). The report from the government showed that the hikikomori youth spent more time on the Internet and posted more content there overall. However, the present study which examined hikikomori affinity was inconsistent. In contrast, cyberbullying victimization has been positively associated with feelings of hikikomori affinity.

問題と目的

過去数十年、日本における深刻な社会的および教育的問題の一つとして、ひきこもりの研究が蓄積されている。ひきこもりとは仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせず、6か月以上続けて自宅にひきこもっている状態であり（厚生労働省, n.d.）、国立精神衛生研究所によると、地域住民の1.2%にあたる最低232,000人が、生涯のうちにひきこもりを経験していると推測されている（Koyama et al., 2010）。ひきこもりは、仕事をしない、またあらゆる教育にも一切参加せず、しばしば長期間、場合によっては数年以上にわたり家の中に留まっている状況であるため、公衆衛生上の大きな問題となっている（Furlong, 2008）。

従来、ひきこもり現象はうつ病や社会不安のような精神医学的症狀の面から説明されることが多く、厚生労働省（2003）は、ひきこもりの約30%に精神科による診断的な合併症がみられると報告している。しかしながら、近年では、特定の心理的障害を伴わないひきこもりがしばしば発生している（内閣府, 2010年）。この点について、インターネットおよび携帯電話の長時間使用や依存傾向が、今日のひきこもりと関連があるのではと示唆する研究者もいる。インターネット依存に関しては過去10年間以上欧米を中心に研究が重ねられており、低い自尊心、孤独、社会的不安、うつ病などとの関連が確認されている（Armstrong, Phillips & Saling, 2000; Kim & Davis, 2009, Suh & Choi, 2006）。孤独感を抱える人々にとって、インターネットは、多くの人とコミュニケーションや社会的な繋がりを可能にする魅力的なツールとい

える（Morahan-Martin & Schumacher, 2003）。実際、今日のひきこもりの若者は、実際の社会的繋がりは少なくとも、SNSやオンラインゲームを通して仮想の社会的接触を保つことが可能である（Wong, 2009）。そしてひきこもりの若者は、ひきこもり経験のない一般群と比較してインターネットに費やす時間は長く、またウェブサイト上への投稿も多く行っている（内閣府, 2010）。しかし、インターネットの長時間利用はひきこもりだけの特殊な問題ではない。スマートフォンの普及に伴い子どもたちのインターネットや携帯電話の使用時間が長くなり、高校生の6割がインターネット依存傾向を示している（総務省, 2013）。また、スマートフォンの使用によりインターネットと携帯電話の境目が曖昧になっており、携帯電話依存の問題も大きな課題であるといえる。しかしながら、インターネット・携帯電話依存とひきこもりの関連については十分な調査がなされていない。

今日の若者のインターネットの問題を議論する際、ネットいじめも挙げられる。ひきこもりの若者が社会からひきこもる理由として様々なことが考えられるが、いじめとの関連はよく議論されており、いじめの被害体験が不登校およびひきこもりと関係していることを示してきた（例：文部科学省, 2012）。東京都（2008）による報告では、ひきこもりの若者の44%が仲間からいじめられた経験を持っていることが分かった。近年は、従来のいじめ研究とともにネットいじめに関する研究が積極的に行われており、心理的な負の影響が指摘されている。例えば、ネットいじめ被害者は、抑うつ症状（Perren, Dooley, Shaw, & Cross, 2010）、社会的不安（Dempsey, Sulkowski, Nichols, & Storch, 2009）、およびストレス（Aoyama, Saxon,

& Fearon, 2011) のレベルが高いことが報告されている。また被害者の自尊心および自己効力感についても著しく低下することが明らかになっている (Fredstrom, Adams, & Gilman, 2010)。しかしながら、ネット上でのいじめ被害者についても、従来のいじめに見られるようなひきこもりと関連性があるかについてはまだ明確ではない。

ひきこもりの問題の予防に関して、近年ひきこもり親和性について注目が集まっている。ひきこもり親和群は、家に閉じこもることなく、社会生活および対人関係を維持していることから、ひきこもりとは区別される (東京都, 2008)。この親和群は、一見、通常の世界を送っているようにみえるため特定は困難であるが、一般群と比較すると良い対人関係を育むことに困難を抱えており (東京都, 2008)、およそ150万人の若者 (有病率は約4%) がこの群に属していると内閣府の調査 (2010) では推測している。ひきこもりに関する研究は過去30年間積み重ねられているが、この親和性に関する学術的研究はまだ十分ではない。現代社会における若者の友人関係およびコミュニケーションを理解する上で、インターネットや携帯電話の使用を考慮することは不可欠である。そして、若者の日常生活におけるインターネットおよび携帯電話の使用法、およびネット上での負の体験 (ネットいじめ) が、若者のひきこもりへの親和感情にどの程度与える影響を理解することは重要である。したがって本研究は、ひきこもり親和性と、インターネットや携帯電話による依存的・ネットいじめ体験との関連について明らかにする。

方法

調査対象者

248名の高校生 (M = 16.20才, SD = 1.07, 男性 = 44.7%, 女性 = 55.3%) と333人の大学生 (M = 19.98才, SD = 1.22, 男性 = 27.1%, 女性 = 72.9%), 計581名 (M = 18.39才, SD = 2.19, 男性 = 34.5%, 女性 = 65.5%) を調査対象者とした。高校生の対象者は、関東地方の公立学校の学生であ

り、大学生の対象者は、関東地方と中部地方の国立大学の教育学部の学生であった。

手続き

2011年秋に、授業時間内に一斉調査で実施した。調査に要した時間は10～15分程度であった。

調査内容

57項目で構成された調査紙では、人口統計の情報、インターネットおよび携帯電話の使用パターン (例: 携帯電話に費やした時間、および1日の携帯メールの送受信件数) について質問した。これらの質問と共に、以下の概念が測定された。

a) ひきこもり親和性感情

ひきこもり親和性の測定には、内閣府 (2010) の調査で使用された4つの質問項目が使用された (例: 私は、家に閉じこもる人々の気持ちが理解できる、など)。回答選択肢は、「はい」、「どちらかと言えばはい」、「どちらかと言えばいいえ」で、本サンプルでのクロンバック α は0.66であった。

b) インターネットおよび携帯電話の依存傾向

依存的使用など問題のあるインターネットやオンラインゲーム利用に関する複数の尺度を基に (e.g., Kim & Kim, 2010), 14の質問項目を作成した。質問項目は4つの下位尺度からなる: ①パーソナルな対人関係への優位 (例: ネット上で交流する人たちのほうが、実生活のまわりの人たちよりも親しみを感じる), ②セルフコントロールの欠如 (例: ケータイを使う時間を減らそうと努力したが、うまくいかなかった), ③日常生活への支障 (例: ケータイを使い過ぎで学校の勉強や他の活動に支障がでている), ④離脱症状 (例: ケータイメールがチェックできなかつたり、ネットに接続できなかつたりすると不安になる)。回答の選択肢は、「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」の4件法であった。本サンプルのクロンバック α は0.86であった。

c) ネットいじめ

ネットいじめの加害・被害の経験については、それぞれ6つの質問により測定した（例：「過去12か月の間に、ネット上にうわさや悪口を書き込まれたことがある」、「過去12か月の間に、ネット上に他人写真や個人情報などをのせて勝手に投稿したことがある」）。これらの項目は、Hinduja & Patchin (2009), および Kowalski & Limber (2007) によって開発されたネットいじめに関する質問を採用した。回答選択肢は、「週に一度以上」、「一週間に一度」、「月に2～3回」、「過去12か月で一から二度」、および「1度もない」であった。本サンプルのクロンバック α は加害が0.57、被害については0.74であった。

分析

上記の測定した変数及び、インターネット・携帯電話の一日の平均使用時間、メールの送受信件数の間において相関関係を確認した。その後、相関関係で有意となった変数がそれぞれの程度ひきこもり親和性の説明変数となるか回帰分析を行った。

結果

記述統計

各変数の平均とSDについては、表1に示した通りである。

相関分析

Pearsonの積率相関係数を求めた結果、いずれ

表1 各変数の記述統計：平均とSD

	高校生	大学生	全体
1. ひきこもり親和性	10.09 (3.83)	9.32 (3.05)	9.67 (3.37)
2. ネットいじめ (被害)	6.65 (2.04)	6.47 (2.08)	6.56 (2.03)
3. ネットいじめ (加害)	6.46 (1.77)	6.30 (1.18)	6.37 (1.44)
4. インターネット・携帯電話依存傾向	26.41 (8.64)	26.18 (7.89)	26.34 (8.08)
5. メール送受信件数	29.4 (52.24)	13.61 (12.93)	20.09 (35.75)
6. インターネット・携帯電話使用時間	5.56 (5.57)	2.18 (1.92)	3.57 (4.20)

それぞれの尺度の点数の範囲は、ひきこもり親和性（4問）で4-16、ネットいじめ（被害・加害各6問）は6-30、インターネット・携帯電話依存傾向（14問）は14-56である。

表2 各変数間の相関

	1	2	3	4	5	6
1. ひきこもり親和性	—	.14**	.01	-.15**	.00	-.07
2. ネットいじめ (被害)		—	.38**	.38**	.13**	.16**
3. ネットいじめ (加害)			—	.20**	.18**	.22**
4. インターネット・携帯電話依存傾向				—	.17**	.31**
5. メール送受信件数					—	.44**
6. インターネット・携帯電話使用時間						—

** $p < .01$

も弱程度ではあるが、ひきこもり親和性は、インターネット・携帯電話の依存傾向と有意な負の相関関係にあることを示した。一方で、ひきこもり親和性とネットいじめ被害経験と有意な正の相関関係にあることが示された(表2)。

回帰分析

相関関係で有意となった2つの変数(インターネット・携帯電話の依存傾向とネットいじめ被害経験)がそれぞれどの程度ひきこもり親和性の説明変数となるか回帰分析を行った。その際に、インターネット・携帯電話の依存傾向に関しては4つの下位尺度に分けて詳細に関係性を検討した。その結果、各変数ともに1%の水準で有意な説明変数であることを示した:バーチャルな対人関係への優位($B = -.37$), ②セルフコントロールの欠如($B = -.15$), ③日常生活への支障($B = .06$), ④離脱症状($B = -.12$), ネットいじめ($B = .25$)。

考察

過去30年日本国内において多くのひきこもり研究が行われており、ひきこもりは様々な要因で引き起こされることが明らかになっている。本研究は、ひきこもりの前段階にある「あるひきこもり親和」の感情にフォーカスし、インターネット・携帯電話の依存的使用やネットいじめ経験との関連について調査した。

内閣府(2010)は、ひきこもり群は、メールやウェブサイトの閲覧・書き込みが多いと指摘している。しかし、本研究では、完全なひきこもりまでは至らない「ひきこもり親和性」状態では、むしろこのような依存傾向は負の関連性を示した。一方ネットいじめに関しては、被害経験とひきこもり親和感情に性の関連性が示され、いじめの被害体験が不登校およびひきこもりと関係していることを示した文部科学省(2012)の調査結果を一部支持するものである。このことから、ひきこもり親和性はネットいじめ被害経験による傷つきといった心理的要因によって高まると予測され、ひきこもり親和性と、実際のひきこもり状態の間に

は差異があることが示唆された。ひきこもり親和性状態では、実際の対人交流によって自らの傷つきを和らげようとして、ネット上での交流を望まない可能性も示唆される。

以上の結果から、従来のいじめ同様、ネットいじめの予防がひきこもりへの親和感情の軽減、そしてひきこもりの早期予防につながることを指摘できる。したがって、今後より積極的な予防介入の努力が必要になるであろう。現在多くの高校や大学でカウンセリングルームや学生相談室を設置しているが、それらの役割は受け身的である。日本国内では精神科医においても、ひきこもり患者を見る際に受け身的な介入を行う傾向があるという(Kato et al., 2012)。しかし、オーストラリア政府では精神病に対する予防介入は政府の財政コスト面において効率がよいと試算する。精神病への早期介入が将来の医療費の削減につながり、社会における経済的も生産性を向上させるからだ(Access Economics, 2009)。ひきこもり親和性自体は精神病ではないが、完全なひきこもり状態になってからでは支援側の負担が大きいと、前段階での適切な介入が必要であることは間違いない。このような積極的な取り組みには、コストもかかり、支援人材の確保も不可欠である。しかし、限られたリソースしかない場合オンライン上でのサポートシステムも利用できるだろう。ひきこもりの約半数が専門家へ相談することに前向きで、37.5%が同じ悩みを抱える人と問題を共有したいと考えている(内閣府, 2008)。したがって、SNSなどを利用したオンラインコミュニティはそのような若者同士を繋げ、所属感を与えられるのではないかと。実際、新入生を対象に大学の公式Facebookページを解説し友達作りに役立てている大学もある(IT Media News, 2013)。ひきこもりの早期防止には、これらのツールを利用してソーシャルスキルトレーニングやオンライン上のカウンセリングを提供すれば人的なコストも節約できるだろう。

最後に、本研究結果に関してのいくつかの限界に触れる。本研究は横断的なデザインで行われたものであり、ひきこもり親和性、インターネット

および携帯電話の依存的使用、ネットいじめの間における因果関係に関する解釈は得られていない。また本研究は、機会サンプリングによって行われたものであり結果の外的妥当性は限られたものである可能性もある。

参考文献

- Access Economics (2009). Potential benefits of a national strategy for child and youth wellbeing. Report by Access Economics for Australia Research Alliance for Children and Youth.
http://www.aracy.org.au/publications-resources/command/download_file/id/119/filename/Potential_benefits_of_a_national_strategy_for_child_and_youth_wellbeing.pdf (2013年4月21日アクセス)
- Aoyama, I., Saxon, T., & Fearon, D. (2011). Internalizing problems among cyberbullying victims and moderator effects of friendship quality. *Multicultural Education & Technology Journal*, 5(2), 92-105.
- Armstrong, L., Phillips, J. G., & Saling, L. L. (2000). Potential determinants of heavier Internet usage. *International Journal of Human-Computer Studies*, 53, 537-550.
- 内閣府 (2010) 若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査)
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf/gaiyo.pdf>
(2012年6月23日アクセス)
- Dempsey, A. G., Sulkowski, M. L., Nichols, R., & Storch, E. A. (2009). Differences between peer victimization in cyber and physical settings and associated psychosocial adjustment in early adolescence. *Psychology in the Schools*, 46(10), 962-972. doi:10.1002/pits.20437
- Fredstrom, B. K., Adams, R. E., & Gilman, R. (2010). Electronic and school-based victimization: Unique contexts for adjustment difficulties during adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 40(4), 405-415. doi: 10.1007/s10964-010-9569-7
- Furlong, A. (2008). The Japanese hikikomori phenomenon: Acute social withdrawal among young people. *The Sociological Review*, 56(2), 309-325. doi:10.1111/j.1467-954X.2008.00790.x
- Hinduja, S., & Patchin, J. W. (2009). *Bullying beyond the schoolyard: Preventing and responding to cyberbullying*. Thousand Oaks, CA: Crown Press.
- IT Media News (2013). 大学がFacebookで友達づくりを支援 近畿大の新入生専用グループに1000人超
<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1304/10/news125.html>
(2013年7月18日アクセス)
- Kato, T. A, Tateno, M., Shinfuku, N., Fujisawa, D., Teo, A. R., Sartorius, N., Akiyama, T., et al. (2012). Does the "hikikomori" syndrome of social withdrawal exist outside Japan? A preliminary international investigation. *Social psychiatry and psychiatric epidemiology*, 47(7), 1061-75. doi:10.1007/s00127-011-0411-7
- Kim, H, M & Davis, K. E. (2009). Toward a comprehensive theory of problematic Internet use: Evaluating the role of self-esteem, anxiety, flow, and the self-rated importance of Internet activities. *Computers in Human Behavior*, 25, 490-500.
- Kim, M. G., Kim, J. (2010). Cross-validation of reliability, convergent and discriminant validity for the problematic online game use scale. *Computers in Human Behavior*, 26, 389-398.
- Koyama, A., Miyake, Y., Kawakami, N., Tsuchiya, M., Tachimori, H., & Takeshima, T. (2010). Lifetime prevalence, psychiatric comorbidity and demographic correlates of 'hikikomori' in a community population in Japan. *Psychiatry Research*, 176(1), 69-74. doi:10.1016/j.psychres.2008.10.019
- Kowalski, R., & Limber, S. (2007). Electronic bullying among middle school students. perspectives on cyber bullying. *Journal of Adolescent Health*, 41, 22-30.
- 文部科学省. (2012). 平成22年度児童生徒の問題行動など生徒指導上の諸問題に関する調査
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/02/_icsFiles/afieldfile/2012/02/06/1315950_01.pdf
(2012年6月23日アクセス)
- 厚生労働省. (2003) 10代-20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン.
- 厚生労働省 (n. d.) ひきこもり施策について
<http://www.mhlw.go.jp/seisaku/2010/02/02.html>
(2013年7月19日アクセス)
- 総務省 (2013). 青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査
<http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2013/internet-addiction.pdf> (2013年7月18日アクセス)
- Morahan-Martin, J. & Schumacher, P. (2003). Loneliness and social use of the Internet. *Computers in Human Behavior*, 19, 659-671.
- Perren, S., Dooley, J., Shaw, T., & Cross, D. (2010). Bullying in school and cyberspace: Associations with depressive symptoms in Swiss and Australian adolescents. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health*, 4. doi:10.1186/1753-2000-4-28
- Suh, B. D., & Choi, E. H. (2006). Internet addiction, self-

- esteem, and loneliness in adolescents. *Journal of Korean Academic Adults Nursing*, 18, 653-659.
- 東京都 青少年・治安対策本部. (2008). 実態調査からみるひきこもる若者のこころ
http://www.seisyounen-chian.metro.tokyo.jp/seisyounen/pdf/14_jyakunen/jittaihoukokusyo.pdf
(2012年3月26日アクセス)
- Wong, V. (2009). Youth locked in time and space? Defining features of social withdrawal and practice implications. *Journal of Social Work Practice*, 23(3), 337-352.
doi:10.1080/02650530903102692